

T. S. エリオットの罪意識への T. E. ヒュームの影響

古賀 元章*

T. E. Hulme's Influence on T. S. Eliot's Consciousness of Sin

Motoaki Koga*

T. E. Hulme, the English poet and critic, who was killed in Belgium during the First World War, played an important role in the development of Western art and thought at the beginning of the twentieth century. T. S. Eliot was quick to adopt Hulme's ideas in the areas of the imagist movement, anti-romanticism, and classicism. Therefore, most critics have noted some similarities in the art and thought of the two men.

When referring to anti-romanticism, Eliot regarded Hulme's belief in original sin as most important and sympathized with his view of stern discipline in mind and body, based on the recognition of original sin. At the same period, Eliot had a consciousness of sin in life, because he tormented his parents and wife. However, little attention has been paid to the influence of Hulme's beliefs and views on Eliot's consciousness of sin in life. Thus, this paper considers how Eliot attempted to treat his own sin under the influence of Hulme.

はじめに

第一次世界大戦に従事していたイギリス海軍砲兵隊の T. E. Hulme は、ベルギーの海岸ウーストダンケルク (Oostduinkerke) で敵陣から砲弾の破片を受けて、1917年9月28日に戦死した。ヒュームは34歳で生涯を終えたけれども、彼が唱えたイマジズム運動や反ロマン主義などは、西洋の文芸や哲学の分野で20世紀の新しい時代精神を求めていた人々に歓迎された。

T. S. Eliot はそうした人々の一人であった。エリオットは1914年8月にイギリスに住むようになっていち早くヒュームの考えに共鳴したので、従来の研究は文芸や哲学などにおける両者の類似点に専ら目を向けた。

ところで、エリオットは自分自身の講義や評論においてヒュームの見解の基調をなす「原罪」説や情緒のコントロールに注目する一方で、三人の人物(父親 Henry Ware Eliot,

Sr., 母親 Charlotte Champe Eliot, 妻 Vivienne Haigh Haigh-Wood) に罪意識を抱くようになる。そうすると、ヒュームの見解は、エリオットに自らの罪意識のあり方を考えさせるのに少なからず影響を及ぼしたのであると思われる。本稿では、エリオット研究において十分に注意を払われていないこの影響を論述してみたい。

1 1916年の講義でのヒュームへの言及

エリオットは、哲学をさらに勉強するためにハーバード大学からシェルドン在外研究奨学金 (Sheldon Travelling Fellowship) をもらって、1914年にドイツのマルブルク (Marburg) 大学へ行った。第一次世界大戦が勃発したために、彼は同大学に僅か2週間滞在した後、イギリスのオックスフォード大学のマートン・カレッジ (Merton College) に籍を置いた。シェルドン在外研究奨学金の期限が切れても、彼はイギリスに住むようになる。

水産大学校研究業績 1645号, 2000年10月2日受付.

Contribution from National Fisheries University, No. 1645. Received Oct. 2, 2000.

* 水産大学校水産情報経営学科社会文化講座 (Lab of Social and Cultural Studies, Department of Fisheries Information and Management, National Fisheries University).

エリオットは哲学の研究や詩作や評論を行う傍ら、1916年の10月3日から12月12日まで、イギリスのヨーク州のイルクリー (Ilkley) で現代フランス文学について6回の講義をした。現在残っている講義要目の中から、最初の二つものに目を向けてみよう。

第1回の講義題目“The Origins: What Is Romanticism?”では、18世紀フランスの思想家・文学者 Jean-Jacques Rousseau が言及されている。彼について次のような要目の文章が見られる。

His main tendencies were

- (1) Exaltation of the *personal* and *individual* above the *typical*.
- (2) Emphasis *upon feeling* rather than *thought*.
- (3) Humanitarianism: belief in the fundamental goodness of human nature.
- (4) Depreciation of *form* in art, and glorification of *spontaneity*.

His great faults were

- (1) Intense egotism.
- (2) Insincerity.

Romanticism stands for *excess* in any direction.

It splits up into two directions: escape from the world of fact, and devotion to brute fact. The two great currents of the nineteenth century—vague emotionality and the apotheosis of science (realism) alike spring from Rousseau. (qtd in Schuchard 27)

エリオットはルソーの大きな欠点を述べている。それは、ルソーに見られるさまざまな傾向（個人に関することの高揚、感情の強調、人間性の根源的な善、芸術の形式の低下、自発性の賛美）である。エリオットは、19世紀の二つの主潮（漠然とした情緒性と科学の崇拜）が上述したルソーの傾向に由来したと判断している。“Romanticism stands for *excess* in any direction. It splits up into two directions: escape from the world of fact, and devotion to brute fact.”から読み取れるのは、現在のロマン主義の特徴もルソーに由来していることである。したがって、エリオットの第1回の講義は、ロマン主義の起源としてのルソーの思

想を批評する内容であったと推測される。

エリオットはこのような考え方をヒュームから深く学んだと思われる。以下でこの点について検討したい。

ヒュームは、19-20世紀フランスの社会主義者 Georges Sorel の *Réflexions sur la violence* を英訳して、*Reflections on Violence* というタイトルで1916年に出版している。1915年には彼の存在を知っていたエリオットは、² 2年後にこの英訳書を書評して、“Mr. Hulme is also a contemporary. The footnotes to his introduction should be read.” (“[A review] of *Reflections on Violence*. By Georges Sorel” 479) と結んでいる。エリオットが注意を払って読んだ英訳書には、次のような記述が記されている。

All Romanticism springs from Rousseau, and the key to it can be found even in the first sentence of the Social Contract—‘Man is born free, and he finds himself everywhere in chains.’ In other words, man is by nature something wonderful, of unlimited powers, and if hitherto he has not appeared so, it is because of external obstacles and fetters, which it should be the main business of social politics to remove. (“Translator’s Preface to George Sorel’s *Reflections on Violence*” 249)

ヒュームは、ロマン主義が人間の性善説を唱えるルソーに廻ることを主張している。この主張は、エリオットの先の第1回の講義要目の文章“The two great currents of the nineteenth century—vague emotionality and the apotheosis of science (realism) alike spring from Rousseau.”を連想させる。彼の脳裏には、ヒュームの存在があったと言えるであろう。

ここでエリオットがヒュームのルソー観を踏襲する背景を考えてみたい。エリオットはハーバード大学大学院で、Irving Babbittの講義“Literary Criticism in France, with Special Reference to the Nineteenth Century”を受けている。後年、エリオットはこの講義を振り返って、すでに出版されていたバビットの二つの著書—*Literature and the American College* と *The New Laocoon*—を大学院生の時に知っていたと語っている (“A Commentary” [Oct. 1930]: 115)。そうすると、当時の彼がバビットからこれら二つの著書の内容を聞かされたことは十分にあり得るであろう。John D. Margolis は、バビットの前者の著書に見られる文章 “Without this inner principle of restraint man

can only oscillate violently between opposite extremes, like Rousseau,..." (*Literature and the American College* 60) に言及して、この引用文と同じ考えをエリオットが抱いたと述べている (7)。イルクリーでの講義で19世紀の主要な観念の参考書としてバビットの *Masters of Modern French Criticism* が記載されていること (Schuchard 31) を引き合いに出して、マーゴリスは同講義でもバビットの影響が見出されることを述べている (9-12)。これらの指摘から察すると、エリオットはバビットの講義を経験したからこそ、ヒュームのルソー観に深く接近することができたのであろう。³

エリオットの第2回の講義題目 "The Reaction against Romanticism" では、次のような要目の文章がある。

The beginning of the twentieth century has witnessed a return to the ideals of classicism.... The classicist point of view has been defined as essentially a belief in Original Sin—the necessity for austere discipline. (qtd in Schuchard 27-28)

20世紀は古典主義の時代であることが表明されている。この時代の古典主義的視点が定義されている。その視点は、「原罪」への信念と、その信念に基づく厳しい訓練の必要性である。第1回の講義要目で見られた語句 "the world of fact" は、「原罪」の認識を上台とした世界を示唆していたのであろう。

ここで、イルクリーで講義していた頃のエリオットが読んだヒュームの英訳書の次のような序文を引用してみよう。

What is at the root of the contrasted system of ideas you find in Sorel, the classical, pessimistic, or, as its opponents would have it, the reactionary ideology? This system springs from the exactly contrary conception of man; the conviction that man is by nature bad or limited, and can consequently only accomplish anything of value by disciplines, ethical, heroic, or political. In other words, it believes in Original Sin. We may define Romantics, then, as all who do not believe in the Fall of Man. ("Translator's Preface to Georges Sorel's *Reflections on Violence*" 249-50)

ヒュームは、ロマン主義者と違って、人間の性悪説と訓練による物事の達成を説いている。ヒュームのこの立場の背

後にあるのが「原罪」への信念である。

上の引用文を参考にすれば、第2回の講義要目から考えられるのは、ヒュームのように、「原罪」説を根底にして厳しい訓練の必要性を強調しているエリオットの姿であろう。その姿は、イルクリーでの講義全体の参考書としてヒュームの英訳書が紹介されている事実 (Schuchard 30) からもうかがわれるであろう。

2 1916年前後のエリオットの人生とヒューム

エリオットは1916年のイルクリーの講義で、ヒュームの思想（「原罪」説と厳しい訓練の必要性）に強く引かれた。それは、当時のエリオット自身に罪意識があったからであると推測される。ここでは、1916年前後の彼の人生にヒュームの思想がどのように関係しているのかを調べてみることにする。

1910年10月にハーバード大学大学院修士課程を修了した後、エリオットは1年間の勉学をする目的でパリへ行っている。その目的は、この都市で本当の詩を学ぶためであった ("What France Means to You" 94)。しかし、両親は最初この勉学に賛成しなかった。特に強く反対した母親の気持ちは、彼女が息子に宛てた1910年4月3日付の手紙から想像できるであろう。⁴ 両親がこのような反応を示したのは、息子の行動がエリオット家の家風（「公共への義務」、「慈善」、「立派な仕事」）(Pritchett 73) から逸脱しているからであったと推察される。

パリから帰国したエリオットは、1911年にハーバード大学大学院博士課程に進学して、哲学を専攻する。3年後、彼は哲学を研究するためにイギリスに渡り、そのまま同国に住むことになる。そこでは生活の変化が起こる。それは、彼が知り合って間もないイギリス人のヴィヴィアンと1915年6月26日に結婚したことである。しかし、母親は二人の結婚が優生学的に良くないと判断したり (Ackroyd 144)、大学で哲学の研究を続けてくれることを期待していた ("To Bertrand Russell," 23 May 1916, *The Letters of T. S. Eliot* 139)。父親も母親と同じように、息子がアメリカに帰国して哲学の勉強をしてくれることを望んだ (Ackroyd 65)。

このように、イルクリーで講義をしていた頃のエリオットの人生は、両親の期待に背くものであった。そのことから浮き彫りになるのは、両親への彼の罪意識であろう。この罪意識をうかがい知るのには、彼が母親に書いた手紙 (1917年10月24日付) の次のような内容である。

There are so many things I don't like to think of, because I think often that I used to be very selfish and self-indulgent in many ways, and quite unappreciative of your and father's kindness and generosity. Now, of course, when the time has gone by, I think of these things, and there is nothing I can do—I cannot even write letters as often as I want to. (*The Letters of T. S. Eliot* 203)

彼は、利己的で自己中心的なために、両親の優しさや寛大さに感謝しなかったことを書き綴っている。彼の心の中にあつたことの一部は、本稿で紹介したように、両親に苦悩を与えた事柄（フランスへの遊学、イギリス人との結婚、学究の道を選択しない生活、イギリスでの定住）であろう。エリオットは1916年のイルクリーでの講義で、ヒュームの「原罪」説を拠り所として人間の自制を強く説いた。その頃のエリオットは両親への罪意識を抱いていた。これらのことを結びつけてみると、この講義の内容には彼の個人的な罪意識が暗に反映されていたのであると判断できるであろう。もしそうであれば、彼にとってヒュームの思想は、イルクリーで講義するのに参考になったばかりではなく、人生における罪意識のあり方と対応を考えるのにも参考になったのであると言えるであろう。

3 1924-30年の執筆活動でのヒュームへの言及

エリオットはヒュームの思想をその後も受容している。ここでは、エリオットの1924-30年の執筆活動に見られるヒュームへの言及を考察してみよう。

ヒュームの *Speculations* が1924年に Herbert Read の手で出版された。同年にこの思索録を読んだエリオットは、自ら主宰する雑誌 *The Criterion* の中で、ヒュームを20世紀の新しい精神態度の先駆者として評価している (“A Commentary” [Apr. 1924]: 231)。2年後のエリオットは同じ雑誌の中で、この思索録が “a tendency ... toward a higher and clearer conception of Reason, and a more severe and serene control of the emotions of Reason” (“The Idea of a Literary Review” 5) を例証する著書であると考えている。彼は *Speculations* を取り上げて、理性を働かせることによる情緒の訓練の必要性を言っている。

後に、エリオットは1929年に発表した評論 “Second Thoughts about Humanism” を次のような文章で終えている。

‘... What is important, is what nobody seems to realize — the dogmas like that of Original Sin, which are the closest expression of the categories of the religious attitude. That man is in no sense perfect, but a wretched creature, who can yet apprehend perfection. It is not, then, that I put up with the dogma for the sake of the sentiment, but that I may possibly swallow the sentiment for the sake of the dogma.’ (490-91)

ヒュームは一連の評論 “A Notebook” を1915-16年に発表している。リードはこの一連の評論の内容を短縮して、“Humanism and the Religious Attitude” というタイトルで思索録に収録している。上の文章はこのタイトルの評論からの引用文 (71) である。エリオットは、ヒュームに従って、「原罪」の認識が宗教態度に欠かせないことを指摘したのである。

1年後、エリオットは評論 “Baudelaire” の中でも、上述した「原罪」の認識の重要性を展開している。この評論から次のような文章に目を向けてみよう。

‘In the light of these absolute values, man himself is judged to be essentially limited and imperfect. He is endowed with Original Sin. While he can occasionally accomplish acts which partake of perfection, he can never himself be perfect. Certain secondary results in regard to ordinary human action in society follow this. A man is essentially bad, he can only accomplish anything of value by discipline — ethical and political...’ (430)

この文章も “Humanism and the Religious Attitude” から引用された一節である (68)。そこでは、ヒュームはこの一節を宗教態度の説明として書いている。したがって、エリオットは “Baudelaire” の中でも、ヒュームと同じような宗教態度を取っているのである。

1924-30年のエリオットの評論でうかがわれたヒュームへの言及は、イルクリーでの講義の要旨に沿ったものである。エリオットは、少なくとも1916年以来、前述したヒュームの思想を受け入れていると言えるのである。

4 1924-30年のエリオットの人生とヒューム

1924-30年に執筆活動をしていたとき、エリオットはヒュームの思想（「原罪」説と厳しい訓練の必要性）が20世紀の時代精神であると見なしている。エリオットのこうした姿勢が彼の人生にどのように反映されているのであろうか。ここでは、この点を調べてみることにする。

エリオットは、1917年からロイズ銀行 (Lloyds Bank) に勤務しながら、1922年から *The Criterion* の編集長をしていた。しかし、母親は息子の雑誌の仕事に強く反対した (Ackroyd 125)。また、彼は結婚当初から妻の神経症による精神異常に悩まされ続け、Bertrand Russell に宛てた1925年5月7日付の手紙の中で、妻との別荘を表明している (Russell 174)。その時期の彼は、空虚感を深わせる1925年の“The Hollow Men”⁵ が最後の詩であると思っている (letter to Marianne Moore, 31 Jan. 1934 ; Lehmann 5)。この思いは、母親に与えた苦しみや夫婦生活の破綻による罪悪感から抜け出せないでいることを示唆する。

エリオットは1924年と1926年の評論で、ヒュームの宗教態度に同意して、情緒のコントロールを訴えていた。その背景には、エリオットの上述した人生があったからであろう。

その後、エリオットに人生上の転機が訪れている。それは、Faber and Gwyer 社 (現在の Faber and Faber 社) からクリスマス用の詩の執筆を依頼されたことである。その結果、人間の再生を扱った4編の詩 (1927年の“Journey of the Magi”, 1929年の“A Song for Simeon”, 1929年の“Animula”, 1930年の“Marina”) が発表された。⁶ その発表がきっかけとなって、これら4編の詩のテーマをさらに展開した *Ash-Wednesday* が1930年に完成された (Lehmann 5)。詩人としての再出発は、エリオットにとって人生の再出発でもある。

エリオットの人生の再出発が *Ash-Wednesday* にどのように描写されているのかを理解するために、この詩とダンテの作品 *La Vita Nuova* との関連に注目する必要がある。なぜなら、エリオットは Paul Elmer More に宛てた手紙 (1930年6月2日付)の中で、*Ash-Wednesday* が *La Vita Nuova* をヒントに書かれたことを次のように述べているからである。

My only original contribution is possibly a few hints about the Vita Nuova, which seems to me a work

of capital importance for the discipline of the emotion; and my last short poem “Ash Wednesday” is really a first attempt at a sketchy application of the philosophy of the Vita Nuova to modern life.

人生における「情緒の訓練」(“the discipline of the emotion”) は、エリオットの場合、妻に取って代わる愛の対象を求めることである。彼は、それを実現するための「情緒の訓練」の方法をダンテの作品の中に見出している。

上述のことをもっと具体的に考察するために、エリオットの *Dante* (1929) の次のような文章を引用してみよう。

The system of Dante's organization of sensibility – the contrast between higher and lower carnal love, the transition from Beatrice living to Beatrice dead, rising to the Cult of the Virgin, seems to me to be his own. (66)

この文章は、エリオットが考える *La Vita Nuova* の特色を示している。彼が注目するのは、ダンテが生きていたベアトリーチェから死んだベアトリーチェへと考えを変えて、聖母マリア信仰に基づく崇高な愛を描いていることである。*Dante* は、母親が1929年に死去した直後に出版されている。そうすると、エリオットにとって崇高な愛は母親に向けられていると言えるであろう。

La Vita Nuova のこのような特色を手本にしたのが、母親の死去の直後に書かれた *Ash-Wednesday* の次のような場面であろう。

Our peace in His will

.....

Sister, mother (21)

この詩行を一般的に鑑賞するならば、語り手が聖女に救いの祈りを行っていることになる。その一方で、この詩行にエリオットの個人的情緒が暗示されているとするならば、どのようなことが考えられるのかを以下で検討してみたい。

エリオットは *Dante* の中で、13世紀イタリアの修道女 Piccarda de Donati の言葉 “la sua volontade è nostra pace.” (“His will is our peace.”)⁷ を解説している。それは、誰にとっても平等である神の祝福にはいろいろな段階が存在するということである (52)。また、この詩の初版本には “To My Wife” という献辞があったので、“Our”

は妻とエリオットを示唆している。加えて、ダンテの先の作品の特色から判断して、彼は母親を聖女ににまで高めているので、“Sister, mother”は母親を暗に示している。そうすると、エリオットは、妻と私が違った人生を送ることになっても二人に神の恵みがあるように祈ると共に、神へこの願いをとりなしてくるよう母親に希求しているのである。

既述したように、エリオットは1924-30年の評論や著書の中でも、「原罪」説を基に情緒の厳しい訓練を唱えるヒュームの思想に共鳴した。エリオットは、ヒュームのこの思想の具体的な方法をダンテに倣い、二人の女性（これまで苦しませてきた母親、離別によって悲しみを与える妻）に抱く罪意識の克服を1930年の詩の中で目指している。エリオットは、この詩と同じ年に発表した評論“Baudelaire”の中で述べた言葉“the recognition of the reality of Sin is a New Life ; ...”(427)を自分の人生で実際に行っているのである。

エリオットはEmily Haleに宛てた1930年10月6日付の手紙の中で、特にヒュームの「罪」の概念から影響を受けたことを書いている(Ackroyd 76, 342n)。この手紙の内容から思い浮かぶことは、エリオットが1924-30年の執筆活動においてヒュームの思想へ及したことであろう。その頃のエリオットの人生を考えると、この手紙の内容から思い浮かぶもう一つのことは、彼が自分の罪意識のあり方をヒュームの影響のもとで理解しようとしたことであろう。

おわりに

エリオットは1914年にイギリスへ来て、そのまま同国に定住することになる。それは、アメリカに帰国して勉学の道を望んだ両親の意に反する行動であった。また、彼は翌年にイギリス人と突然結婚して、そのことを好意的に受け止めない両親を苦悩させることになった。後に、彼は1925年に精神異常であった妻と別れる決意をし、その決意が彼女も苦しめることになると思った。

エリオットはこうした一連の出来事に直面して、両親や妻に対して罪意識を持った。そうした時期に彼は、「原罪」説を根底にして情緒のコントロールを力説するヒュームの思想に共感する発言を繰り返していた。これらのことから判断すると、エリオットは自分の罪意識のあり方を理解するのに、ヒュームの思想が参考になったのであると結論づけてよいであろう。

注

1. 詳しくは、高田 319-23 を参照。
2. エリオットの書簡集には、彼の次のような記述内容が見られる。
“I have been seeing a good deal of some of the modern artists whom the war has so far spared. One of the most interesting of the radicals – Gaudier-Brzeska – do you know of him? – is in the trenches, (as is the interesting T. E. Hulme) ; ...”(“To Mrs Jack Gardner,” 4 Apr. 1915, *The Letters of T. S. Eliot* 94)
3. この点については、エリオットの発言“The influence of Babbitt (with an infusion later of T. E. Hulme . . .) is apparent in my recurrent theme of Classicism versus Romanticism.” (“To Criticize the Critic” 17) から理解できるであろう。
4. 母親は次のように書いている。
“I can not bear to think of your being alone in Paris, the very words give me a chill. English speaking countries seem so different from foreign. I do not admire the French nation, and have less confidence in individuals of that race than in English.” (*The Letters of T. S. Eliot* 13)
5. この詩についての解説には、拙稿““The Hollow Men”における二つの世界の暗示”を参照。
6. これらの詩における再生のテーマについての解説は、平井 68-70 を参照。
7. ビッカルダの言葉とその英訳は、*Dante* 52 から引用したものである。

引用文献

- Ackroyd, Peter. *T. S. Eliot: A Life*. New York: Simon and Schuster, 1984.
- Babbitt, Irving. *Literature and the American College*. Boston: Houghton Mifflin Company, 1908. Clifton: Augustus M. Kelley, 1972.
- Eliot, T. S. “[A review of] *Reflections on Violence*. By Georges Sorel. Translated, with an Introduction and Bibliography, by T. E. Hulme.” *Monist* 27.3 (July 1917) : 478-79.
- . “A Commentary.” *Criterion* 2.7 (Apr. 1924) : 231-

- 35.
- . "The Idea of a Literary Review." *Criterion* 4.1 (Jan. 1926) : 1-6.
- . "Seconds Thoughts about Humanism." 1929. *Selected Essays*. 1932. London : Faber and Faber, 1951. 481-91.
- . *Dante*. London. Faber and Faber, 1929.
- . *Ash-Wednesday*. London : Faber and Faber, 1930.
- . Letter to Paul Elmer More, 2 June, 1930. Paul Elmer More Papers. Princeton U Library, Princeton.
- . "Baudelaire." 1930. *Selected Essays*. 419-30.
- . Letter to Marianne Moore. 31 Jan. 1934. Marianne Moore Papers. The Rosenbach Museum and Library, Philadelphia.
- . "What France Means to You." *La France Libre* 8. 44 (15 June 1944) : 94-95.
- . "To Criticize and the Critic." 1961. *To Criticize the Critic and Other Writings*. London : Faber and Faber, 1965. 11-26.
- . *The Letters of T. S. Eliot, Vol. 1: 1898 - 1922*. Ed. Valerie Eliot. London : Faber and Faber, 1988.
- Hulme, T. E. "Humanism and the Religious Attitude." *Speculations: Essays on Humanism and the Philosophy of Art*. Ed. Herbert Read. 1924. London: Routledge and Kegan Paul, 1971. 1-71.
- . "Translator's Preface to Georges Sorel's *Reflections on Violence*." *The Collected Writings of T. E. Hulme*. Ed. Karen Csengeri. Oxford : Clarendon P, 1994. 246-52.
- Lehmann, John. "T. S. Eliot Talks about Himself and the Drive to Create." *New York Times Book Review* (29 Nov. 1953) : 5, 44.
- Margolis, John D. *T. S. Eliot's Intellectual Development, 1922-1939*. 1972. Chicago : U of Chicago P, 1973.
- Pritchett, V. S. "'Our Mr. Eliot' Grows Younger." *New York Times Magazine* (21 Sept. 1958) : 15, 72-73.
- Russell, Bertrand. *The Autobiography of Bertrand Russell, 1914-1944*. 1968. London : George Allen and Unwin, 1978.
- Schuchard, Ronald. *Eliot's Dark Angel : Intersections of Life and Art*. New York : Oxford UP, 1999.
- 古賀元章. 「"The Hollow Men" における二つの世界の暗示」『英語英文学研究』(広島大学英文学会) 37 (1993) : 59-70.
- 高田美一. 『T・E・ヒューム「思索ノート」研究』. 東京 : 北沢図書出版, 1974.
- 平井正穂編. 『エリオット』. 東京 : 研究社, 1967.